絆創膏

榎弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絆創膏

【Ｎコード】

Ｎ１７１６Ｃ

【作者名】

榎弥

【あらすじ】

一枚の絆創膏に、狂おしいほどの愛情を感じちゃう話です。

彼女と別れた。
嫌いになったわけじゃない、むしろ今でも好きだ。
だけど、物事には限界というものがあって、どうやら僕達はその限界を迎えてしまったみたいだった。

「別れよう」と僕はできるだけ冷酷に言った。
「どうして好きなのに別れるの？」と彼女は電話口の濁った声で応えた。
「限界なんだ」
「あたしが嫌いなの？」
「好きだ」
「じゃあなぜ？」
「限界なんだよ」

そんなような会話が一時間続いた後、僕達は終わった。
彼女と別れはしたが、メールや電話などの連絡はとっていて、しきりに「もう戻れないの？」と言われたが、僕は冷たくあしらった。

一週間ほど経ったある日、彼女の学校の野球部が定期戦を迎えた。
生徒は全員強制的に応援参加で、僕の家の近くの球技場で行われた。

そろそろ試合も終わっただろうかという頃、彼女から電話があった。
まぁ、ほのかに予想はしていたことだったが。
今、僕の家の近くにいるので少し話がしたいとうことだった。僕は少しの嬉しさと煩わしさを抱えて彼女に会いに行った。

「久しぶり」と彼女は言った。気に入っていた丸顔がやつれて、顔

色が悪かった。
「痩せた？」
「少しね」
彼女は一息つくと、僕が想像していたのとは全く違う、他愛無い話を始めた。

満塁で点を入れたピンチヒッターの先輩がいたこと。
一年生のピッチャーも登板したこと。
最初は相手側に3点もとられていたが、徐々に追いついてついには同点になり、サヨナラヒットで自分の学校が勝ったこと。

「応援に行く前にね」と彼女は右腕をさすりながら言った。
「貧血検査があったの」ちょうど肘の裏あたりに、小さなベージュの絆創膏が貼ってあった。
「なかなか血が止まらなくてね、絆創膏もらったんだ」
それをきいた途端、僕は彼女がとんでもなく弱い生物みたいに感じられた。たった一枚絆創膏を貼っただけなのに、どうして僕は彼女を守れなかったんだろう、とある種の自己嫌悪に陥った。
今や僕にとって、絆創膏は彼女を傷めつけるナイフにも等しかった。
そして、彼女がこうなってしまったのは他でもない僕の責任だった。
理屈などどうでもよかった。冷静に考えれば、僕は狂人並みの思考を持っていたのだろう。

ずっと黙って怖い顔をしている僕に怯えたのか、彼女は「じゃあ、あたしそろそろ帰るね」と言って立ち去ろうとした。だがそれよりも一瞬早く、僕は彼女の右肘の裏を掴んだ。「痛いよ」と声がきこえたが、そんなことお構いなしに僕は彼女を抱きしめた。
「ごめん」僕は蚊の鳴くような声で言った。

「守れなくてごめん」

彼女はそれを聞き取ると、ゆっくりと絆創膏をはがして僕の左胸に貼った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1716c/

絆創膏

2011年1月2日14時00分発行